

追憶記

丹賀砲台の爆発

秘められた偉事の記録

会員 相良 主 殿

【丹賀の丹賀国民学校校長 現住所 佐伯市西中ノノ二二三】

今から二十九年前、私は鶴見洋島の先にある丹賀国民学校に校長として赴任しました。その年、太平洋戦争が始まり、学校でも、すべてが戦時教育一色になつて来ました。

昭和十七年一月十日、軍服姿の将校八名が学校に来ました。

「今度大砲試射の為に要塞に来ましたので、よろしく。聞くとこゝろによると、氣医村をそうですが、軍医も末左の、生徒に病人でもいたら、遠慮なく申し出て下さい。治療しておけますから。」

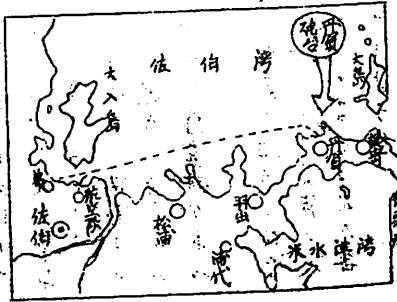
と言いました。その親切な言葉に私は、これから医者が身近にいて、安心できると思い、厚くお礼を申しました。

「今朝、要塞から使いが来て、今日、試射をするから、生徒を山の上下に呼び見守るはうに。またガラス戸などは、全部はずして整理し、爆風で破損せぬように注意して下さい。」

と言つたので、急いでガラス戸をはずして廊下に重畳、職員と一しよに生徒をのけて山の上り来ました。

まもなく、轟然一発、岬の一角が真赤に光りました。続いて、一発、二発と砲声が響きました。四国の方向を見ると、遙か遠い海の上は、まるで、日本海海戦の餘り見るように水柱が立ち上り、壮烈な光景でした。

やがて、試射も終つた模様なので、学校に帰り、私の席に着いたとたん、物凄いや音がしました。窓から顔を出して見ると、要塞の上は真黒でした。学校の近くにも、疊一枚程の鉄板が飛んで来ました。それから何分たつたでしようか、駐在巡查が走つて来ました。



「学校の救急用品を全部持つて、すぐ私と要塞に来て下さい。」
「い。」
というので、早速、必要用品を取まとめ、二人で出かけた。

海岸には、着剣した兵隊が並び、一般村民は家から出ないよう指示されていました。私たちが、急いで行くように指示され、現場にかけつけました。

それは思はず息々とする情景でした。地面は足を敷き、爆死した何人もの将校や兵隊が横になつて並んでいました。頭の形がこわれている人もいたし、腕や脚のない人もいました。大部分の人は出血がひどく、既に殆んど死んでいました。

そこへ巡視船草丸の人が走つて来ました。

「校長先生、早く船の方に来て下さい。」
と言つたので、船着場に駆けつけると、五十人あまりの兵隊が、若し及ぶと、なからうめき声を立てていました。見るとその中に、昨日学校に挨拶に来た軍医もいました。頭が半分に割れていました。急いで包帯をし、脈を見るに糸のようにかすかに感じられました。カンフル注射を打とうとする。

「自分はいから、兵隊を頼む。」

と手をふりません。私は無理に一本打ち、次々と兵隊に打ち続けました。ニダースで私の手持ちは品切れになりました。

「兵舎にまたないか。」

と私が叫びました。兵隊が、赤十字のマーク入りのトランプを持って来ましたので、中からカンフルを取り出し、また次々に注射しました。何分にもこちらは一人、相手は十人あまりですから、大変でした。一人の兵隊がアルコールで消毒し、巡査がアンプルの口を切り、私が注射をし続けました。一通り手当も終つたので、船は出航することにになりました。佐伯の海軍航空隊で治療を受けられたのです。

その日は海が荒れて波が高く、頓死の負傷者を乗せて航空隊まで行くのは大変でした。どうが全員が無事に息のあるうちに航空隊に着いて、治療が受けられるようにと、祈る心で一杯でした。

負傷兵を隊に引渡し、帰ろうとしますと、一人の将校が、

「校長先生、今日は長米隊に泊つていつて下さい。」
と言いました。私も学校が気になるので帰りたいと申しますと、そんなら海軍の船で送りましょうということになり、帰りは航空隊の舟艇に乗りました。

その頃から海は一層荒れはじめ、大じけとなりました。丹波湾の入口に乗ると、日はとつぷり暮れて、航行がむづかしくなりました。

「校長先生、舟のへさきで、進路を教えて下さい。」
と頼まれました。

「面舵、取舵の使い方も知らない。」
と言つて断わると、

「右、左と言つてくれれば、こちらで何とかする。」

このことで、私の側には将校が一名、立っていました。私は真の闇の中を、空を見たり、山の形をすかして見たりして方角を定め、ゆつとこのこと丹波湾に入りました。要塞の前に着いた時は、生きかえつた思いがしました。

それから爆死者の遺体を海岸に收容し、木炭を下に、薪を上にして、石油をかけて火葬にしました。

一夜明け、砲台に行つて見ると、主砲は半分位から折れ、中のゼンマイのような物が、附近に一段い散つて、寄り付かない有様でした。火薬の力のすさまじさをまざまざと見せつけられた思いがしました。

二か月位たつて、西部軍より、司令官と参謀肩章をつけた将校など、十名余りが津波に来りました。

「先日は、大変御苦労でした。」
と礼を述べ、感謝状をくれました。そして私が心急ぎ置をした兵隊が、全員無事だったと知り、大変嬉しく思いました。

(附記)

1. 負傷者を佐伯海軍航空隊に運んだのは水上警察船集丸で、当時乗船して居て血まみれの負傷兵を助けて船に乗せるのに加勢して下さつた人は、今大分市南太平寺に住んでいらっしゃる姫野宗人と言う方です。

2. 丹波砲台はこわれたまゝ、今も残つており、鉄筋コンクリートの頑丈な要塞は、生々しい爆発の跡をそのまま残して、その入口近くには立派な慰霊碑が建つています。

3. しかし佐藤中佐以下の爆死者は、戦死と認められな
いからか、靖国神社にまつられて居らず、遺族の
連対し、国は殆んど何の手当もしてない。気の毒
なことに、その遺族の生活も困窮している。

も血を流すけになつた。十時六分を乗せたころ出発して
くれと言われ、一直線佐伯航空隊崖壁に向つて、全
速力で海上を走つた。そうして崖壁に着き、負傷兵
を海軍航空隊の舟に一人一人渡したが、自分達は岸
壁より隊内に入れてくれないので、其のまゝ夕方出
発して隼丸の寄陸地向こう。警察署の方もおまり
遅いので心配していらしい。
佐賀関に飯淡して前記の事を報告。翌日教書書と
知る左け書いて提出したのであつた。

(中略)

終りに、この時隼丸の乗員も全かを挙げて協力
した事を申し立てておく。

(その二)

竹田市城原 古庄シノ氏より

突然御手紙と差上りて失礼をいたしました。実は十五日廿大
分合同新聞の記事(編者註)を讀ませていただきまして、取敢
えずペンと取りました。

御病床の様子でございしますが、その後御病癒の方は如何で
ございしますか。御案に申上げています。

(註) 昭和四十五年十月十五日朝刊の記事
(大分合同)

私は昭和十七年一月十一日、丹波要塞で戦死した
一人、中尉植山一郎の妹でございします。

昭和三十年三月まで元県立佐伯高等学校に主人
が勤めていましたので(註古庄望生先生夫人)、一度(戦
争中)島に参りまじ左が、今も忘れぬ事は出来ませ
ん。

大きき声で話せず、身の方向を指さしても出来な
い時代で、ただお話をソーツとも聞きして、母で母
を三人や参り送り、帰りのまじだ。まじまじと参り

その後も行かない事と思いつく、最近はおき
らめて、只一月十一日の命日をお墓参りですませて
います。

私共女の姉妹三人が残っていますので、出来る左
け早く現地に持つて、お参りせうたいと考えていま
す。

女学校勤務時代の校長先生の奥様(宮前正五井貞子様)
とはお便りをして、三年前もお宅にお伺いも致しませうござ
います。私共は十八年九月二日の水害や、十九年の航空隊の空
襲も西中の元中学校の道場裏の家で過ごしました。

(中略)

これより又だんくお寒くなつて参ります。十二分御養生
をさいます様にして、今お書きの記録を出来る左けおし
くお書き出来る様にとお祈りいたします。(下略)

(その三)

横濱市 内藤藤静子氏より

突然御手紙さし上げ御毎礼何卒しく御救し下さいませ。

中浦要塞爆発にて殉死いたしました故内藤大佐(当時中佐)
の家内でございします。此の段当時の様子を新聞に発表して下さ
れし由、主人の同期の方の息子さんから九州石油におつとめの
方よりおぼろしく新聞を送つて下さいました。

謙々秘密々でほうむられ、私共には委しい事は
知らされず、何か刺り切れぬ思いで過してかりまし
た。三十年に存なんんとする今日、おな左様の思召
して真実を知る事が出来、有難く厚く御礼を申上げ
ます。

現地に慰霊碑の建てたいるさとも初参りで知れませ
う。戦時中の事ゆえ、昔然靖國に合祀されざると思
て居りましたが、最近お通知強なる身遺族の方
へ報談がなされ、慰霊碑が建てたいるさとも

